

「子どものためのアクティビティスペース・デザイン」

a2200506 伊東静香

背景

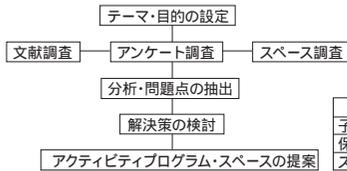
現在、日本では世界最先端の少子高齢化社会の到来により、子育て支援や保育所設置など多くの政策がとられている。しかし、次世代を担う若者や子どもたちに関する問題が浮き彫りになり、社会全体の注目を集めているのが現状である。仙田満教授(東京工業大学名誉教授)の研究によれば、この40年間に子どものあそび空間は1/40程度に減少している。あそび仲間の数も少なく、あそびの方法も1960年代のテレビ、80年代のテレビゲームの席卷は子どもたちのほかあそびを減少させ、引きこもりという新たな現象さえ引き起こしている。子どもたちはあそびを通して創造力や協調性を身に付ける。子どもたちの「あそび環境」が変化してきている今、それに伴い子どもたち自身の思考や感性も変化してきていると言える。

目的

本研究は上述の背景をもとに、子どもたちが積極的に関われる創作活動や学習、ボランティアなど「自発的活動」を構築するための積極的行動プログラム(これを「アクティビティプログラム」と呼ぶことにした)をつくることを目的とする。また、アクティビティプログラムを行うためのスペースをアクティビティスペースと名付け、今後どのようなアクティビティスペースが考案できるかを検討する。

方法

研究の方法は以下のフローチャートに沿って行った。



アンケート集計結果

	配布部数	回収部数	回収率
子ども	281	269	95.7%
保護者	212	172	81.1%
スタッフ	46	33	71.7%

調査結果・考察

本研究において会津地域における県立小学校(3校)と、私立小学校(1校)の子どもたち及び保護者に対してアンケート調査を実施し、普段の生活における子どものあそびとあそび環境、地域子ども教室と子どもクラブ(学童保育)に参加したことのある子どもに見られる変化などを把握した。

また、近年利用が増加傾向にある学童保育の現状を把握し、子どもたちの放課後のあそび空間や学童保育におけるスタッフ体制の客観的な評価を行うことも重要であるため、子どもクラブ(学童保育所)のスタッフにもアンケート調査を実施した。配布部数・回収部数・回収率については上記のとおりである。

子どもたちの普段の生活や地域への関心など

子どもたちの多くは、放課後に家で友だちとあそんだり、塾に行ったりして過ごしている。普段のあそびについては、友だちとゲーム(テレビゲーム)やボールあそびなどをしている子どもが多く、また塾については、ほとんどの子どもが何かしらの塾に通っている。地域活動等への参加についてみると、全般的に参加している子どもは少ないが、「近所のお祭りなどへの参加」については、比較的参加している子どもが多い。自分が住んでいる地域で、顔と名前の方を知っている大人、いつも声をかけてくれる人の存在については、子どもたちの多くが「いる」と認識している。

家族形態やお父さん、お母さんとの関わり

家族形態は、4～5人の核家族が最も多いが、祖父と祖母がいる家庭の割合は、全体の約4割と都市部と比べても圧倒的に多く、会津の地域性として挙げられる。父親、もしくは母親のいない家庭の割合については、決して少なくはない。また、両親に対して子どもたちの多くは「あまりあそんでいない」と感じているようであり、あそびの内容については、父親とは外あそび、母親とは内あそびをしてあそんでいる傾向があるが、両者においてもゲーム(テレビゲーム・ポータブルゲーム)をしてあそぶ割合は高くなっていると言える。



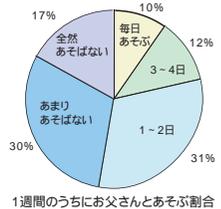
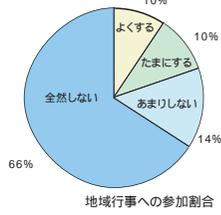
2006.9.24 日経新聞より



射水市大島町絵本館 子どもたちが手作りの絵本を作っている。

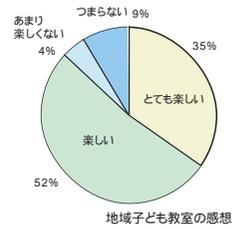


羽根木プレーパーク プレイリーダーと一緒にペーゴマをする子どもたち。



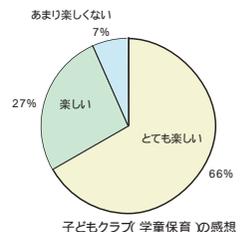
地域子ども教室に参加した感想や自身の変化など

会津若松市において、地域子ども教室に対する子どもたちの認識度は低く、参加したことのある子どもの数も少ない。しかし、参加したことのある子どもたちに地域子ども教室についての感想をみると、全体の約4割が「とても楽しい」と感じており、楽しいと感じる理由としては、「友達とあそべるから」や「普段できないあそびや活動ができるから」が多く、友だちの存在と面白い活動内容の2点が主な評価軸となっている。参加する前と後での自身の変化については、「放課後や学校の休みの日は外であそぶようになった」「興味があることを図書館やパソコンで調べるようになった」などについて比較的強く変化を感じている。今後の地域子ども教室については、楽しいと感じる理由と同様に、友だちの存在と面白い活動内容が求められる。また、パソコンや英語などをやりたいとしている子どもも多い。



子どもクラブに通うようになってからの感想や交流関係

子どもクラブ(学童保育)に対する子どもたちの認識度は、地域子ども教室よりも高く、実際に子どもクラブに通っている子どもは、全体の約2割程度である。子どもクラブでの活動内容については、主に勉強とあそびをしていると答えた子どもが多く、全体の約4割が「とても楽しい」と感じているようである。楽しいと感じた活動としては、「子どもクラブ対抗ドッチボール大会」が最も多く、親子で参加することができ、イベント性のある活動の人气が高い。子どもクラブにおいても地域子ども教室と同様、友だちの存在と面白い活動内容の2点が主な評価軸となっている。好きな場所については、「2階の部屋(和室)」と「ホール」が多く、天候に左右されずに色々な活動の出来る、屋内の広々としたスペースと、広くはないが少人数でその場の雰囲気作りやすい可変性のあるスペースの2種類が挙げられた。今後の子どもクラブについては、火花やお祭りなど、イベント性の高いものをしたいと感じているようである。



解決策の検討

以上の調査を通して、子どもの本来あるべき姿とは、1つのことに夢中になり、思いっきり目の前を楽しむ姿であると感じた。しかし実際は、あそぶスペースや方法を安全面などから大人(保護者)に制限されている場合がほとんどである。そのため、現代の子どもたちは自ら何かを始める、新しいことに挑戦する、ということが不得意である。子どもの自発的活動を促すには、プレイリーダーのような形で、子どもたちにあそびの指導や外あそびの方法を伝え、そして安全管理を担う人々が必要と言えるだろう。また、子どもクラブ(学童保育)などの施設においては、子どもたちが普段体験できないプログラムを中心に、子どもたちの興味関心を引き、発見や気づきを促すことが重要である。

アクティビティプログラムの提案

アクティビティプログラムについては、より実践的であり、具体的であることが重要と考え、今までの調査資料の中から抜粋し、以下の表にまとめた。

プログラム	内容	領域
1 あそホール	塩電市国際交流員のロバート・タックさんと一緒にイギリスのあそびや巨大ジェンガーを楽しむ	国際交流
2 シャボン玉であそぼう!	あそぼうた、砂絵、シャボン玉あそび	工作活動
3 配水管サーキット	ペットボトルや牛乳パックなどのリサイクル容器で道を作る。	工作活動
4 光の不思議、謎の物体「カタクリーム」	分光器を通して光の性質を学んだり、かたくり粉を使った不思議を楽しむ「ダイラタンシー現象」	科学
5 環境学習会	夏ふれあい自然体験。自然に親しもう。(天体観測、井戸水撒き、横ストープ体験、バーベキュー、レクリエーション等)	環境学習
6 家業体験	夏休みに保護者の方に協力をいただいて受け入れ先を探し、1日職業体験を実施	総合学習



日本の音色、和楽器に親しもう! 指に爪を付けて真剣にお琴を弾く女の子。



豆はかせになろう! 先生と一緒にお手玉を作る子どもたち。



「あっ!あれ私のだよ-『どれどれ-?』 子どもたちは、展示ボードにある自分の作品を見つけ、友達と紹介合っていた。



アクティビティスペース・イメージモデル

アクティビティスペースの提案

アクティビティスペースについては、上記のアクティビティプログラムが行いやすいスペースであることを与件とし、敷地を会津総合運動公園内に設定して、屋外と屋内の両方のスペースを検討した。子どもためのアクティビティスペースとしては、調査分析時で抽出された「天候に左右されずに色々な活動の出来る、屋内の広々としたスペース」と、「少人数でその場の雰囲気が作りやすい、可変性のあるスペース」の2つが、子どもたちの自発的行動を促すスペースとして重要な役割を果たすと言える。